

# 日本IT書紀

070 修羅

04 含牙篇  
卷之九 修羅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十

修羅

一

太平洋の戦局が大きな転換点にさしかかっていたとき、大東亜戦争（陸軍の戦い）も転機を迎えていた。香港、シンガポール、コレヒドール、ジャワ、スマトラと連戦連勝を重ねていた陸軍は、ガダルカナル島で前進を阻止されていた。

ミッドウェー海戦の敗北とガダルカナル島からの撤退、つまり一九四三年二月七日で大日本帝国の戦いは終了したのも同然であった。こう書くのはそれ以後、二年六か月も続いた戦闘で傷つき斃れていった二百万人を超える人々を侮辱するような思いがある。

だが、国民の生命と財産の保全に全責任を負うことが、国家というものの最終的な存在意義であるとすれば、余力を残して講和を目指す動きが封殺されてしまったのは、いかに悲しいことだった。

ガダルカナル島から日本軍の撤収が完了した（とされる）

翌日の四三年二月八日、『機密戦争日誌』は次のように記している。

斯くしてガ島の消耗戦は茲に終了し、船舶の消耗も次第に減少すべく予想せられ、大東亜戦争は再び常道に乗りたる感あり

陸軍参謀本部および大本営は、まだこの戦争の本質を理解していなかった。彼らは「消耗戦」という言葉を使いながら、それはガダルカナル島に限定したことだと解釈していた。

開戦のとき、参謀本部は

——イギリスを降伏させればアメリカは戦意を失う。

と読んだ。

ところが今度は、連合国軍が

——ドイツが降伏すれば、日本は戦意を失う。

と読んでいた。

四三年に入って連合国軍は勝利をほぼ確信するようになっていた。この時点でナチス・ドイツ軍は北アフリカでロンメル将軍率いる機甲師団が敗北し、冬將軍の前にスターリングラードから撤退を余儀なくされていた。

またイタリア・ファシスト軍は四一年一月、エチオピア

戦線で大敗して急速に勢いを失い、四二年末時点でムツリーニ政権の崩壊は時間の問題と見られていた。状況は大きく変わりつつあった。

その象徴的な出来事は、四三年一月十四日にモロッコのカサブランカで開かれた米英拡大会談である。会談には両国政府首脳と軍参謀が集まり、次のようなことが確認された。

- 一、英米両国はナチス・ドイツの打倒を第一に優先する。
- 一、太平洋戦線はアメリカ合衆国が主に担当する。
- 一、アジア戦線においてイギリスはビルマ奪回作戦「アナキム」に専念する。

このことは、アメリカ合衆国はヨーロッパ戦線に影響を及ぼすような大規模かつ長期的な作戦を太平洋戦線で実施しないことを意味していた。地中海のヤルタでルーズベルトがチャーチルに言ったように、当分の間、アメリカ合衆国軍は日本軍を「ベイビー・アロング」においてほしい、というのである。

そこでアメリカ合衆国海軍が考えたのは、日本軍の動きを封じ込める作戦だった。

三月十二日、アメリカ統合参謀本部主催の太平洋軍事会

議では、ベイビー・アロングを基本方針とする「エレクトロン」作戦が採択された。

マッカーサーが指揮する陸軍第六、第八軍とハルゼー麾下の太平洋艦隊が連携しつつ、太平洋に散在する島々をしらみつぶしに制圧し、じわじわと日本に圧力をかけていくことになった。

このとき決定された十三の作戦の中に、山本五十六の暗殺、ラバウルの制圧、ニューギニア島の奪回、アリュウシヤン列島からの日本軍の排除、インド・中国からのビルマ戦線支援および、日本本土爆撃などが入っていた。

エレクトロン作戦はただちに実行に移され、四月十八日、アメリカ海軍のP-38双胴戦闘機が連合艦隊司令長官・山本五十六大將を乗せた海軍一式陸上攻撃機を撃墜することになった。遺体が発見されたのは四月二十日である。大本営は国民にこの事実を秘匿し、アメリカ軍もまた暗号解読の事実を知られたくないために沈黙を守った。

五月二十九日、北の守りであったアリュウシヤン列島キスカ島の山崎部隊が玉砕した。それを代償にして駐留部隊五千六百三十九人が脱出に成功した。このころになると、さしもの零戦もアメリカ軍に弱点が見抜かれていたため、大きな戦果をあげることができなくなっていた。

七月、ヨーロッパ戦線で連合国軍がついにシチリア島上

陸を果たした。イタリアの喉元に匕首を突きつけたのである。これがためにムッソリーニ政権が崩壊した。

八月三日、中部ソロモン諸島のニュージョージア島をアメリカ軍が奪回した。

十月十八日、ニューギニアから日本軍が消えた。

十一月一日、アメリカ第三海兵師団がブーゲンビル島に上陸した。この島には日本の陸軍四万四千人、海軍二万一千人の計六万五千人が配置されていた。

また、その西北に位置するニューブリテン島には陸軍七万五千人、海軍四万人の計十一万五千人がいた。ソロモン諸島の守備隊を加えると、この地域だけで日本兵は三十万人に達していた。

ところが制海権を失い、制空権を維持できなくなった島の日本軍は孤立し、食糧、武器、弾薬、医薬品などの補給が乏しくなり、ガダルカナル島やニューギニア島と同じ状況が生まれつつあった。大本営はなすすべを知らなかった。

『機密戦争日誌』一九四四年一月二十六日付

三十万玉砕の秋到らば、好むと好まざるとに拘らず、国内の正気勃然として興り、真に皇国の興廢を自覚し、裸一貫、総力の結集に邁進し得べし

二

同様のことがビルマ（ミヤンマー）方面でも発生した。一九四四年一月に発動した「インパール作戦」（「ウ」号作戦）がそれである。

朝日新聞社の記者としてこの作戦に同行していた丸山静雄は『インパール作戦従軍記』（岩波新書）で次のように書く。

インパール作戦とは、ビルマに進入した日本軍が幾多の作戦によってほぼ全ビルマを占領したあと、さらにビルマ国境を越えてインドに進攻しようとした一大作戦をいう。この作戦はビルマを確保するためにはビルマの防衛線を国境外に推進しなければならぬとする戦略と、インドに兵を入れ、インドを独立させて英国を浮き上がらせ、英米の連合戦線を分断することによって太平洋戦争を終結に導いてゆきたいとする政略とが結びついて企図されたものである。

作戦は第十五軍（軍司令官は牟田口廉也中将）が三個師団を持ってインパール平原に拠る英軍第四軍（軍団長はスカーズ中將）の三個師団を攻撃するというもので、主力

(第三十三師団Ⅱ弓兵团)をもつて南からインパールに迫り、一部兵力(第十五師団Ⅱ祭兵团)をもつて東からインパールを衝き、他の有力兵团(第三十一師団Ⅱ烈兵团)をもつて長駆ウクルル山中を突破してコヒマに進出、英軍の退路を断つという大胆な構想であった。

このあたりを図解的に説明すると、日本の陸軍は次のような理屈をひねり出した。

——我が陸軍が戦うべき相手はイギリス軍であつて、なぜならイギリスを攻撃することはナチス・ドイツを側面から支援することになるからである。海軍が太平洋で戦っているアメリカ軍との戦争は、所詮、今大戦の副次的なものに過ぎない。

何とも珍妙な理屈だった。

実態は中国大陸での戦闘が膠着状態に陥つたことの打開策であつたにもかかわらず、目的として、

①インド―雲南經由でイギリス、アメリカの支援物資が中国に送られているのを遮断すること。

②日本本土爆撃を行っているB―29の発進基地をチャンドラ・ボースが率いるインドの反英組織との連携で壊滅すること。

——などが掲げられた。

ビルマ方面に大本営が投入した兵力は、独立混成第二十四旅団、第十五軍(第三十一師団、第十五師団、第三十三師団)、第二十八軍(第二師団、第五十四師団、第五十五師団)、第三十三軍(第十八師団、第五十六師団、第五十三師団)だった。このうち牟田口廉也中将麾下の第十五軍約十二万人がインパール作戦に充てられた。

なぜ牟田口だったかという点、

——戦争の引き金を引いた張本人である。

というのが理由だった。

牟田口は盧溝橋事件を反省したわけではなく、

「もし自分の力によってインドに侵攻し、大東亜戦争に決定的な影響を与えることができれば、今次大戦勃発の遠因を作つたわたしとしては、国家に対して申し訳が立つ。男子の本懐としても、まさにこのうえなきことである」

と功名に駆られていたのだから始末に負えない。

屁理屈と片意地、功名心のあげく、陸軍参謀本部はとんでもない指令を發した。

——食糧、弾薬は歩兵が携行し得る三週間分をもつて限度とする。

こんなバカな作戦があるか。

ガダルカナル島に孤立した日本陸軍の将兵に対して、海

軍は消耗を覚悟の上で食糧や武器弾薬を送り続けた。ところがインパール作戦では、

——食糧は占領先で調達し、窮すれば資材運搬用の牛馬を食すべし。

というのである。

このような前近代的で非合理的な方針がまかり通ったのは、もはや玉碎戦しか打つ手がなくなった証拠でもあった。

### 三

三月八日、インパール作戦が発動された。その三日前にイギリス軍のウインゲート空挺旅団がビルマに降下している。十五日、牟田口中将率いる第十五軍がチンドウイン川（ミャンマー最大のエーヤワディー川＝旧イラワジ川の支流）に到達し、渡河作戦が敢行された。

ビルマ方面の制空権は、すでにイギリスに握られていたし、第十五軍に与えられた航空機は二百機に満たなかった。牟田口は

——短期にインパールを陥落するには、自動車中隊百五十、駄馬輜重兵中隊六十が必要。

と申請したが、大本営が送ってきたのは自動車中隊二十六、駄馬輜重兵中隊十四に過ぎなかった。これは牟田口に

とつても予想外のことであったに違いない。

作戦の序盤は順調に進み、四月六日に日本軍はコヒマ（ミャンマー北部の交通の要）を制圧したが、ここで足が止まった。アメリカが機械化部隊二個師団を派遣して日本軍の前進を阻んだほか、イギリス空挺ゲリラ師団が日本軍の補給を妨害した。

そのために日本軍の兵士は野草を食べて命をつなぎ、多くの命を代償にして敵から奪った武器と弾薬で戦い、折からの豪雨と泥濘の中、マラリア、デング病、コレラに斃れていった。

四月、第三十一師団長の佐藤幸徳（中将）は悲痛な電報を打った。

弾一発、米一粒毛補給ナシ

敵ノ弾、敵ノ食糧ヲ奪ツテ攻撃ヲ続行中

文末の「攻撃を続行中」は、なお戦意を失っていないことを示すための形容詞に過ぎなかった。爆弾を抱えてイギリス軍の戦車に体当たりしていく兵士、衣服をつけたまま半ば白骨化している兵士の遺体を目の当たりにして、六月三日、佐藤は独断で撤退を決意した。

児島襄は『太平洋戦争』下巻「悲劇のインパール作戦」

で次のように記す。(原文ママ)

道ばたには点々と負傷兵が横たわっていた。その眼、鼻、口にウジ虫がうごめいている。のびた髪の毛に真つ白にウジ虫が集まり、白髪のように見える兵が歩いてきた。木の枝に妻子の写真をかけ、その下でおがむように息絶えた死体、マリアの高熱に冒されて譫言を口走る者、ぱっくりあいた腿の傷に指を入れてウジをほじくり出す兵士……泥の中にうずくまったまま

「兵隊さん、手榴弾を下さい……兵隊さん」

と呼びかける兵士がいる。

苦しみから逃れるため、自決のための手榴弾がほしい、というのである。

六月三日の第三十一師団の独断撤退で第十五軍は崩壊した。独断で撤退を支持した第三十一師団長・佐藤幸徳は軍法会議にかけられることを覚悟したが、実をいうと彼が

「弾一発、米一粒も補給ナシ」

の電文を討った直後の四月三十一日、ラングーンの作戦司令部では

「インパールには戦局を左右するような戦略的価値なし」という報告が行われていた。

また五月十五日には東京の陸軍参謀本部に

——インパール成功の公算は逐次低下しつつあり。という報告が届けられた。

にもかかわらず参謀本部は

「インパールはいまや世界的問題である」

と面子にこだわって、作戦の継続を決定した。このために将兵三万五百二人が戦闘で、四万一千九百七十八人が戦傷病で死亡した。

『機密戦争日誌』一九四四年七月四日付

ビルマ『ウ』号作戦中止せらる。東亜情勢帝国に取り益々非なり。此の秋奮起せずんば悔を千載に残さん

——悔を千載に残さん。

などと無責任に文学的な表現をしている場合ではなかった。牟田口という名譽欲のかたまりのために何万もの兵士を見殺しにした罪の意識は片鱗もなかった。

このインパール作戦を

「ひどい作戦だった」

と回顧するのは、のちに伊藤忠商事からセンチュリリーサーチ センター社長・会長となり、情報サービス産業協

会会長を務めた高原友生である。

高原は一九四四年に陸軍士官学校を卒業し、歩兵第五十八聯隊に配属された。祖父は陸軍軍人、父は海軍少将という軍人一家だったから、軍人になることには全く抵抗がなかった。

歩兵第五十八聯隊は、その年の二月に発令された「ウ」号作戦に参加し、高原は少尉ながら聯隊旗手という名誉ある仕事を任された。

「わたしらは司令部に直属していたからまだよかった。でも食べ物はないし、イギリス軍の追撃で部隊はどんどん崩れていく。とうとう捕虜になってビルマで抑留生活を送りました」

そのとき、現地の人々が親切に接してくれた。

「たいへんな迷惑をかけたのに、お世話になった。そのご恩返しをしている」

高原はビジネスの現場から退いた現在、非営利特定事業法人ミャンマー経済研究所(MERAC)理事長として、文化交流や経済支援活動に従事した。



## 補注

イタリア・ファシスト トスカーナ公国、シチリア王国、ローマ教皇国を統一して一八七〇年九月に成立したイタリア王国は、第一次大戦では連合国に参加したが国内の経済は低迷し、社会主義運動が活発になった。社会主義運動はやがてナシヨナリズムと結びつき、一九一九年ごろを境に新しい社会運動として「闘争的ファッショ」が台頭した。社会主義から出発した北一輝が国粹主義に傾斜していったプロセスと近似している。ファッショ(Fascio)は共和制ローマ時代、法官の権威を示す紋章を意味する。

戦闘的ファッショ運動は一九二一年の総選挙で三十五議席を獲得し、同年十一月の第三回大会でベニート・ムッソリーニ(一八八三―一九四五)が「国民ファシスタ党」の結成を宣言した。ムッソリーニは退役軍人や憂国論者の支持を得て「黒シャツ隊」と呼ばれる行動部隊を編成し、これを武装化して国軍を圧倒する勢力を形成した。二二年十月、約四万人の黒シャツ隊が「ファシスト革命」を掲げて国民ファシスタ党への政権移譲を要求するデモ行進を開始すると、ときのファクタ内閣は戒厳令を敷いて阻止しようとしたが国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ3世が戒厳令を拒否したことから政権が瓦解した。これが「ローマ進軍」と呼ばれる。

ローマに入ったムッソリーニは国王に組閣令を出させて組閣、当初は閣僚十四人の十人は他の政党から出さなかったが二三年に選挙法を改正して長期政権の基礎を築いた。以後二六年までの間に政治結社の禁止や言論統制などにより独裁政権化し、さら

に二八年にいたって大評議会を国家最高機関とすることによってムッソリーニは国民ファシスタ党をすら超越する絶対的な地位を獲得した。

ナチス・ドイツとの関係は初期においては決して友好的でなく、オーストリア併合をめぐって一時期は軍事衝突の危機的緊張を持つ状況にあった。ところが三四年末に勃発したイタリア領ソマリランドとエチオピアの紛争にイギリスが介入したことから反英に転じ、イタリア軍がエチオピアに侵攻してこれを併合した。ナチス・ドイツと軍事同盟を結んだのは三九年五月である。

アナキム ビルマ奪回作戦の名称。ABDA司令長官・インド軍最高司令官アーチボルド・ウェーヴェルの幕僚が策定した「アラクソ作戦」を継承して立案された。

エレクソン作戦 マッカーサーが立案したとされる。一九四二年秋に行われたアメリカ陸海軍・政府首脳による太平洋軍事会議で海軍省のアーネスト・キング作戦部長(大将)はオレンジ計画を改良した「レインボー計画」を提唱した。ハワイを拠点に中部太平洋のサモア↓ビルバート諸島↓マーシャル群島↓トラック↓グアムと軍を進めフィリピンから日本本土を攻撃するというものだったが、同じ海軍のハルゼー、ニミッツ、スプルーアンスといった諸将が反対した。陸・海軍が役割を分担しつつ日本軍を封じ込めるというマッカーサー案が採択され、これがのちに「カートホイール(車輪)作戦」となった。

ムッソリーニ政権の崩壊 イタリア軍はユーゴ、ギリシャへ進軍したが軍事力不足のためあっけなく連合国軍に奪回され、四三年七月、連合国軍がシチリア上陸作戦(ハスキー作戦)に成功すると、ファシスト評議員はムッソリーニ不信任を可決した。

**ウインゲート空挺旅団** 制式名称はイギリス第三インド師団第七十七旅団、第百十一旅団である。この二旅団は四三年二月六日から十一日までの間、グライダーで「ブロードウェイ」と呼ばれたフーコン地区インドウに降下し、九千二百五十人、驢馬一千三百五十頭、火砲・弾薬、車両など二百五十トンをもって作戦行動を開始した。

指揮を取ったウインゲート少将は「われわれは敵の胃袋に入った。わが剣を敵の肋骨に突き刺した」と言った。対して牟田口中将は「降りた連中は補給をどうするのか。放っておいても干乾になる。牟田口は幸運だ」とその存在を軽く見ていた。

**ウインゲート** Orde Charles Wingate / 1903 ~ 1944。第二次世界大戦中ビルマ戦線で英印軍特殊空挺部隊チンデイトを編成した。一九四四年三月二十四日、インパールの飛行場で事故死した。

**ビルマ戦線への補給** 日本軍の補給を担ったのは泰緬鉄道だった。バンコクのノンブラドックからビルマのタンピサヤまで四百五十キロを結ぶ。鉄道の建設には連合国軍（イギリス、オランダ、フランス、オーストラリア）捕虜五万人とタイやビルマの労働者十万人が動員され、捕虜一万五百六十二人、労務者三万人が死亡した。このときは映画『戦場にかける橋』、そのテーマソング「クワイ川マーチ」で知られる。

四三年十二月に全線が開通し、四四年五月まで毎月一万二千トン前後の物資を運んだ。ところがタンピサヤから前線までトラックがなかったため、日本軍は戦闘に従事できない傷病兵を補給部隊に編入し彼らに物資を背負わせて山道を運ばせた。それを知ったイギリス空挺旅団は日本の補給兵を樹上から狙撃して妨害した。

狙撃されなくても途中で動けなくなりそのまま死亡することも少なくなかった。

**日本兵の戦いぶり** 児島襄『太平洋戦争』（下）には次のような悲惨な記述がある。

「第百六十一インド旅団のM3戦車が戦場に現われた。連射砲を命中させても、この大型戦車は平然としている。サイダー瓶にガソリンを詰めた火炎びん攻撃にも屈しない。黄色爆弾をフトンに詰めた。フトン爆弾を抱いた肉攻班が、わが身をキャタピラの下敷きにして、やつと擱座させる。その轟音を合図に、「ワッショイ、ワッショイ」と声をかぎりに叫びながら、敵陣に殺到するのである」

**戦車「M3」** アメリカ合衆国で開発・製造され、第二次大戦中、連合国軍に供与された。重量十二・九トンの軽戦車と二十六トンの中戦車があった。イギリス第七機甲旅団に属する王立第二戦車連隊にはM3軽戦車が百十五両（百五十両とも）配備されていた。

**高原英生** たかはら・ともお / 1925 ~ 2009。二〇〇四年五月、長年の業界活動に対し藍綬褒章を受けた。

# 日本IT書紀 070 修羅

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。